

花のお江戸を歩く会

宿場と紅葉の散策路

「新座市：大和田宿～野火止用水緑道～平林寺」

緊急連絡 = 09085831528

＜散歩道のご案内＞

千年の歴史を秘める大和田氷川神社と、源頼家の伝承が残る普光明寺千体地藏堂など鎌倉時代にはすでにその名が知られていた埼玉県新座の「大和田宿」を巡ります。そして、野火止用水緑道を歩きながら、武蔵野野火止台地13万坪にひろがる広大な平林寺の紅葉を楽しみます。平林寺は総門、山門、仏殿や川越城主・松平信綱夫妻の墓所など数々の県指定文化財と国指定天然記念物の境内林を有する関東を代表する紅葉の名所でもあります。深まる秋の一日、歴史道に佇む「宿場」と目を見張る「紅葉の美しさ」を堪能しましょう。

＜散歩道の順路＞

JR 武蔵野線「新座駅」→野火止公園→野火止用水緑道→伊豆殿橋→平林寺→睡足軒の森→陣屋前→新座市役所→こもれば通り→野火止緑道→新座農産物直売センター（お土産）T→野火止緑道→JR 武蔵野線「新座駅」《ランチタイム》→北口通り→川越街道→鬼鹿毛馬頭観音→大和田公民館 T→大和田氷川神社→鎌倉街道→善光明寺→川越街道→観音堂→大和田宿→JR 武蔵野線「新座駅」（解散）

＜個別ガイド＞

① 平林寺（紅葉散歩）

南北朝時代の永和元年（1375）、武蔵国騎西郡渋江郷金重村（浦和市岩槻区）に、大田備中守の帰依によって建立。開山は、当時鎌倉建長寺の住持だった石室善玖禅師。岩槻城主の大田備中守春桂蘊沢居士の帰依によります。天正18年（1590）5月、豊臣秀吉の岩槻城攻めの際、兵火によって伽藍の大半を焼失。

天正19年（1591）、江戸入りした徳川家康は、鷹狩りで岩槻を訪れた際、焼け残った塔頭の聯芳軒に休息し、軒主乾叟から名僧石室禅師開山による平林寺の由緒を知り、伽藍再建のため朱印状を与えて、騎西郡内50石の土地を寄付。天正20年（1592）には、家康の手習い同輩であった駿河国臨濟寺の鉄山宗鈍禅師を迎えて中興開山としました。

元和4年（1618）、大檀那である大河内秀綱が死去。平林寺が葬送の地となり、それ以前大河内氏の霊廟となりました。秀綱の孫にあたる信綱が大河内家から長沢松平家へ養子に入り、のち別家して大河内松平家を興したことにより、平林寺は大河内松平家の祖廟となりました。

幕府の老中で川越藩主となった松平信綱は、江戸と川越の間にある野火止の原野に平林寺を移し、先祖供養の地にしようとした。しかし当時の住持幽巖禅師は「池ができて澄んだ水があってこそ、月は来るものだ」と語り、「水の無い所に人が住めるであろうか、かような所に仏様は移転を喜ぶであろうか」と諭したと伝えられています。

承応4年(1655)、信綱は玉川上水完成の功績により、同上水からの分水が許され野火止用水を開削。近隣の村々を潤すことができたとともに、それにより幽巖禅師の憂いは払拭され、平林寺の野火止移建が実現することとなりましたが、寛文2年(1662)、信綱は志半ばにして世を去りました。開削から350年以上を経た今でも、信綱が作った野火止用水を境内で見ることができます。

父信綱から平林寺移建を託された子の輝綱は、喪の明けるのを待って移転を幕府に出願。幕府は当時、寺の新規建立を規制していましたが、遺言を遵守しようとする輝綱の切なる願いを聞き入れました。

寛文3年(1663)、輝綱は岩槻平林寺の伽藍及び墓石に至るまで野火止に移し、これに伴い、幕府は同5年7月に、岩槻の寺領に替えて新座郡西堀村と西屋敷の分、合わせて50石を野火止平林寺の寺領として安堵しました。

元禄7年(1694)正月、黙雲禅師の代に輝綱の子で川越藩主松平信輝は、下総国古河に転封となったため、平林寺は一時、のちに川越城主となる柳沢吉保の支配地となりました。

宝永元年(1704)12月、柳沢氏は甲府に転封となり、川越には秋元喬知が入府。しかし野火止領五カ村は川越領とはならず、上野国高崎藩主松平輝貞に与えられました。信綱の孫であり、輝綱の六男である輝貞は、将軍綱吉から「武蔵国新座郡の内祖先の廟所これ有り、願いに付いて永く下し置く」と文言を副えた知行宛行状を与えられました。

こうして、再び平林寺は大河内松平氏の支配するところとなり、明治の世を迎え、現在に至っています。

★総門＝総門は切妻造茅葺の四脚門である。正保5年(1648)に京都詩仙堂の石川丈山によって揮毫された「金鳳山」の扁額が掛けられている。山号の名称は開山石室善玖の師である古林清茂が住した「金陵(現在の南京)」の「鳳台山保寧寺」から「金」と「鳳」を選んだといわれる。

★山門＝山門は入母屋造茅葺の楼門で、左右には「電力王」と称された松永耳庵(1875～1971)寄進の金剛力士像を配している。楼上には釈迦・文殊・普賢の三尊像、十六羅漢像が安置される。正面には石川丈山の揮毫による「凌霄閣」の扁額を掲げている。

★経蔵＝経蔵は二間四方に外縁を廻らした宝形造りで寛文12年(1672)松平久綱室の宗学院によって寄進された。第二十三世糸原圓應老師の筆による「経蔵」の扁額を掲げている。

★仏殿＝仏殿は単層入母屋造の茅葺で禅宗様式を踏襲している。中央の須弥壇には釈迦・阿難・迦葉の三尊像が安置されている。正面中央には天明元年(1781)書家三井親和の筆による「無形元寂寥」の扁額が掲げられている。なお、総門・山門・仏殿・中門の4棟は

県指定有形文化財。

★**戴溪堂**＝第八世黙雲禅宜の筆による「戴溪堂」の扁額が掲げられ、独立性易像、独立性易碑を安置する。独立は黄檗隠元の弟子であり書と医術に秀でた才能を示した。正徳三年（1713）書家深見玄岱（1648～1722）の発願により建立された。

★**半僧坊**＝その縁起をたどると、静岡県引佐郡引佐町にある臨済宗方広寺の鎮守、半僧坊大権現がその源となる。明治二十三年（1890）鎌倉建長寺の守護神として分祀された半僧坊は、同二十七年、第十九世玉圓楚璞の代に平林寺に勧請された。

★**平林寺歴代住職の墓**＝開山石室善玖（1294～1389）は鎌倉時代に入元し、松源崇岳派下の古林清茂に嗣法している。帰朝して京都天龍寺、鎌倉建長寺、円覚寺などに住山した後、平林寺開山となった。第六世幽巖祖岑の代に伽藍とともに岩槻から現在の野火止の地に移された。

★**野火止塚**＝業平塚とともに『伊勢物語』や『廻国雑記』などにもとりあげられた。古くから武蔵野の古歌・詩材になって文学者たちの関心を集め、多くの人々が訪れている。

② 睡足軒の森 T (ライトアップ)

「睡足軒の森」の敷地は国指定天然記念物平林寺境内林の一部で、9,379㎡をもの広さを誇る緑豊かな癒しのスポットです。平成14年より新座市の施設として、その庭園は無料公開されています。

この地は元々江戸時代に上野国高崎藩・松平右京大夫家の陣屋があったところですが、近代になって「日本電力の王」の異名を持つ実業家の松永安左エ門(耳庵)が土地を購入して屋敷を構えました。「近代の三茶人」と称される昭和の大茶人・松永安左エ門は、昭和13年に横浜「三溪園」で有名な原富太郎(三溪)の世話で、飛騨高山付近の田舎家を敷地内に移築させました。その後、昭和47年にその茅葺の田舎家と敷地が菩提寺である平林寺に譲られて寮舎「睡足軒」として利用されていました。

現在、「睡足軒の森」の敷地と建物は平林寺の所有ですが、睡足軒と紅葉亭は新座市の施設として新座市・朝霞市・志木市・和光市在住者は有料で利用することができます。自然に囲まれた素晴らしい環境の中で、茶道・華道・俳句など日本の伝統的文化を楽しむことも可能です。**こもれびの道→野火止緑道→JA 農産物直売センターT→JR 武蔵野線「新座駅」**

③ 鬼鹿毛 (オニカゲ) 馬頭観音

旧川越街道沿い、大和田と野火止の境に、石造の馬頭観音さまが建っています。元禄9（1696）年の銘文がある三面六臂の馬頭観音は、この地区の人たちによって、鬼鹿毛さまと呼ばれていて、名馬鬼鹿毛にまつわる伝説が伝えられています。

「昔、秩父の小栗という人、江戸に急用があつて、愛馬鬼鹿毛に乗り道を急ぎました。大和田宿に入ると、さすがの鬼鹿毛も疲れが見え、この場所にあつた松の大木の根につまずき倒れました。しかし、さすがは名馬、ただちに起きあがり主人を目的地まで届けたといひます。所用を終えた主人が先ほど馬をとめたところまで戻ると、いるはずの鬼鹿毛の姿が見えませぬ。不思議に思ひましたが仕方なく家路を急ぎました。やがて、大和田の地に

さしかかると、往路愛馬が倒れた場所に鬼鹿毛の亡きがらを見つけました。鬼鹿毛は主人の急を知り亡霊となって走り続けたのでした。村人は、のちに鬼鹿毛の霊を吊って馬頭観音を建てたといひます。これが「鬼鹿毛の伝説」です。→旧川越街道→大和田公民館 T

④ 大和田氷川神社

新座最古の神社の一つで、大和田一体の鎮守です。神社の縁起によると、延暦 21 (802) 年の創建と伝えられています。本堂は一間四方の入母屋造りで、周囲の壁面には、みごとな白木の彫刻が施されています。

この神社のお祭りに登場する「大和田囃子」は、毎年 4 月 19 日の神楽奉納の時と、夏祭りのときに披露される地域の人々によって奉納される伝統芸能です。また、7 月の夏祭りには、「裸神輿」が担ぎ出され大変にぎわいます。裸神輿は、別名「荒れ神輿」とも呼ばれ、川越街道の名物となっています。→旧鎌倉街道

⑤ 普光明寺

福寿山普光明寺は、大同元年 (806 年) 開山と伝えられる寺院です。寺脇を「鎌倉みち」が通り、木立に囲まれた情景は訪れる人に、ひと時の清涼感を与えています。

歴史を感じさせる境内には、古い千体地藏堂があり、今も 33 年目ごとのご開帳で知られています。(次回の開帳は平成 37 (2025) 年です。) →川越街道→観音堂

⑥ 大和田宿

天平宝字 2 年 (758) に新羅郡が武蔵国に建郡され、大和田はその郡下に属しました。新羅郡は、その後、延長 5 年 (927) に新座 (にいくら) と名称が転じていますが、新座 (にいざ) 市が「新座」の市名を冠する由来は、この歴史的郡名に発するものです。

大和田は、鎌倉時代の正安 3 年 (1301) の古写経に、大和田郷と記されてあることから、当時は国衙領 (こくがりょう) としての郷であったことがうかがえます。鎌倉道に沿って、古くから創建されていた普光明寺 (ふこうみょうじ) や、氷川神社 (ひかわじんじゃ) が中心となり、柳瀬川流域の大和田郷に、文化の華がひらきはじめました。

江戸時代に入ると大和田は、江戸と川越を結ぶ道筋 (川越街道) にあり、柳瀬川の渡河地が宿となって、伝馬の継立てが行われるようになりました。これが大和田宿です。大和田は江戸時代前期に、旗本 (はたもと) 芝山氏の知行地 (ちぎょうち) でしたが、のちに川越藩から上野国高崎藩松平氏の藩領になり、以後明治維新まで、その支配下でした。→JR 武蔵野線「新座駅」(解散)